

5月にはマタイ 24章から、キリストの終わりの日についての教うを学びました。25章はそれに関連したメッセージが続いています。

### 1. 天の御国のたとえ (1~5)

①十人の娘たち (1)「そこで、天の御国は、たとえば言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです。」天の御国のたとえについては、マタイ 13章にもあります。その違いは何かといえば、今朝の箇所は 24章の終わりの日の教えに関連して、天の御国についてたとえが語られています。その内容はとてもわかりやすく示唆に富んでいます。登場するのはまず花婿です。一人の花婿が結婚のために来るのにあたって、十人の娘たちが、灯を携えて出迎えるという設定です。当時の婚宴とは、すでに法的に婚姻関係にある者達が、夫婦生活に入ることを祝う時でした。花婿が花嫁の家に迎えに行くというのが普通だったようです。ただし、ここでは花嫁の家で婚礼が行われる設定です。ここに出てくる娘たちというのは、花嫁の友達です。彼らは花婿が夜にやって来るにあたって、ともしびを持って出迎えようとしていたのです。ともしびは陶器で作られたものもあれば、金属で作られた物もありました。

②愚かな娘と賢い娘 (2~3)「そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。愚かな娘たちは、ともしびを持っていたが、油を用意しておかなかった。」ここでは十人の娘のうちの五人は愚かで、他の五人は賢かったといえます。なぜかという、愚かな娘たちはともしび皿を持っていても、補充用の油は持っていなかったのです。ともしび皿には一定量の油しか入りませんから、それが無くなれば、補充しなければなりません。灯油はオリーブ油だったようです。愚かな娘たちは、花婿がすぐに来るだろうと思って補充を持ってこなかったのです。

③花婿が遅れ (4~5)「賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうととして眠り始めた。」一方、賢い娘たちは、ともしびの中の分ばかりではなく、補充用の油を入れ物に入れて携えたのです。荷物が多くなりますが、どうしても必要だと考えたのです。ところが、花婿はいつまでたってもやってきません。もう娘たちは総じてうとうととして、眠りはじめてしまったのです。

### 2. 油を用意できなかった娘たち (6~節)

①夜中になり (6~7)「ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。迎えに出よ』と叫ぶ声がした。娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。」花婿は到着が遅れましたが、夜中になってやって来ました。今日でもサプライズのようにして、突然と花婿がやって来るのが



あるようです。「花婿が来たので、みな迎えに出てください」という声がしましたので、娘たちも起きて、自分のともしびの準備しました。

- ②ともしびが消えそう (8)「ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。『油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。』」ところがです。愚かな娘たちには予想外のことでした。眠っている間も油を使ってしまっていたのでしょう。いざ花婿を迎えようとなった時に、ともしび皿の中を見ると、油が十分ではないのです。まさに風前の灯です。賢い娘たちに、「灯が消えそうです。油を分けてください。」とお願いをしました。
- ③分けられません (9)「しかし、賢い娘たちは答えて言った。『いいえ、あなたがたに分けてあげるにはとうてい足りません。それよりも店に行き、自分のをお買いなさい。』」賢い娘たちが補充分として持ってきたのは、他の人に分けるほどにはありません。ですから、断ったのです。そして、店に買いに行くことを勧めたのです。

### 3. 祝宴に入った娘たち (10~13 節)

- ①花婿が来た (10)「そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸が閉められた。」それに応じて、五人の愚かな娘たちは油を買いに出かけました。ところが、その間に花婿が来てしまったのです。賢い娘たちは準備を整えて、花婿と一緒に祝宴に行くことができました。その後、戸は躊躇なく閉められました。
- ②開けてください (11~12)「そのあとで、ほかの娘たちもきて、『ご主人様。ご主人様。開けてください。』しかし、彼は答えて、『確かなところ、私はあなたがたを知りません』と言った。」一方、ようやくにして油を調達し、帰って来た愚かな娘たちですが、賢い五人の娘たちはいません。そして、家の門の戸は閉ざされています。懸命に、主人に戸を開けてくださいとせがむのですが、主人は「あなたがたのことは知りません」というのです。たとえばここまでです。
- ③目を覚まして (13)「だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。」たとえの後に、イエスキリストはおもむろに言われるのです。「目をさましていなさい。」すでに24章42節においても戒められました。44節においても「用心していなさい。」とも言われました。終わりの日に、再臨の主が来られる時については、誰も知らないからです。

《結論》先週はペンテコステ礼拝で、第一コリント2章を学びました。一週間空いていますので、24章について思い出さないこともあろうことと思います。24章ではまず終わりの日の兆候が語られました。偽キリスト、戦争、敵対、飢饉や地震、偽預言者、憎み合い、不法がはびこり、愛が冷えると。さらには天変地異があった後には、人の子(再臨の主)が天の雲に乗って来るとも伝えられました。そして、天地は滅びても、主の御言葉は決して滅びないとも、教えられました。その上で、主は24:45以下で、忠実な賢いしもべとはいった誰かと問いかけられ、たとえ話をされました。悪い僕は主人が帰るのはまだ先と高をくくり、欲のなすまま、遊び惚けていました。ところがしもべの主人は思いがけない時に帰ってきて、彼を厳しく罰せられ、彼は泣き歯ざしりするというのです。

24章末尾のたとえ話と今朝のたとえ話とは、同じメロディーで、語らんとしていることも同じ方向です。主人に仕事を任されたのにもかかわらず、自分勝手なことをやっていたしもべと愚かな娘には共通してことがあります。主人が帰ってくるのはまだ先だと思っていた男と補充の油を用意していなかった娘たちとは、どんなところが共通しているのでしょうか。一読しただけなら、悪いしもべは仲間をなぐり、欲のなすがままで行っていて、いかにも悪辣です。それに比べれば、ともしびの油を用意しなかった娘たちは、うっかりした人々ほどの印象にも映ります。しかし、主人の戻って来る時、花婿がやって来る時についての受取り方については、共通した大問題があります。つまり、双方とも目をさましていれば、その時というものも悟るチャンスがあったのです。事実、賢いしもべは、主人がいつ帰っても良いように行動していました。また、賢い娘たちは花婿が遅れて来た時のために、補充の油を用意しておきました。

この双方はたとえですが、これは終わりの日の時には、再臨の主がやって来られることを示しています。再臨の主が突然のようにやって来られた時に、主を侮っていれば、不信仰と悪辣を示すことになり、愚かな娘たちのように、準備不足でお迎えすることができないことになってしまいます。終わりの日については、前兆も示されていますから言い訳もできません。

私達にあてはめて考えてみましょう。あなたは何を考えて生きているでし

ょうか。何を求めて歩んでいるでしょうか。自分の欲望が満たされること、こ

の地上での栄誉を得ること、人に褒められることなどが心の王座

を閉めていませんか。人の目を気にしていませんか。主の心を知ろうとしていれば、備えることができたのです。主なる神に喜ばれること、主なる神に栄光が帰されることをもとめ、主をほめたたえていくことこそ、私達が心を向けていくことではありませんか。今朝のたとえ話でいえば、余分の油を用意しておくというのは、いつも主のことを思っていることです。賛美、祈りをしつつ、御言葉に親しみ、礼拝をささげていく。自分のものを握りしめるのではなく、手を開いてゆだねて歩んでいく。そうしておけば、再臨の主がいつ来られても、喜んで主をお迎えすることができるのです。主よ、霊の目をあけてください。